

理事長エッセイ

世紀に一度



公益社団法人 日本畜産学会
理事長 小澤 壯行

レベッカをごぞんじですか？私が若いころから好きなバンドの一つです。ボーカルのNOKKOは、その小さな体を振り絞って出すパンチある歌声が魅力です。彼らの曲で「76th STAR」というタイトルがあります。ボーカルNOKKOはさびの部分で♪ I' m 76th No.1 STAR 世紀に一度舞いおりるエンジェル ♪とシャウトします。最初は歌詞の意味が分からなかったのですが、どうやら76年に一度地球に最接近するハレー彗星のことだと分かりました。最後にこの星がやってきたのは1986年2月でした。私は学部4年生で大学院への進学も決まったころです。ぼんやりと見上げた夜空には、思っていたよりもずっと小さくてぼおっと光る小さなハレー彗星が浮かんでいました。そして「次に君がやって来る2061年は間違いなく会えないんだよなあ」と一人語りしたものです。

さて、その「世紀に一度」が9月に私たちの学会にやってきます。私たちが所属する公益社団法人日本畜産学会が100歳の誕生日を迎えるのです。この学会は大正13年（1924年）に当時の東京大学畜産学研究室教授である岩住良治先生を初代会長として設立されました。学会機関誌『日本畜産学会報』第1巻は同年9月10日に発行されています。会員数は200名弱、年会費は6円であったとの記録が残っています。またこの年の1月にはロシア革命を率いたレーニンが死去、昭和天皇のご成婚、11月には日本で最初の放送局である東京放送（のちのNHK）が設立されています。

畜産学会100歳のお祝い会は9月16日に開催します。第一部として記念式典を、第二部は記念講演会を一般の方にも公開します。第一部記念式典では、農水省畜産局、（公社）中央畜産会、全国農業協同組合連合会（全農）、New Zealand Society of Animal Production (NZSAP)、（公財）伊藤記念財団、（一財）糧食研究会および（一財）旗影会からご来賓をお招きします。そのうち農水省畜産局からは新農業基本法をめぐる状況について、中央畜産会からは昨今の畜産経営の変化について、全農からは畜産物をめぐる流通について、NZSAPからはニュージーランド畜産の概況と諸課題についてお言葉をいただきます。

続く第二部では、私たちの生活に不可欠な食肉・乳・卵の生産および畜産経営の視点を基礎として、日本における畜産の歴史、現況および将来展望等について5名のシンポジストから発表していただきます。座長は山形大学の木村直子会員にお願いしました。「未来志向の畜産業：温故知新」を眞鍋昇会員、「食肉生産をめぐるわが国の歴史・現状・展望」を入江正和会員、「乳を基盤とした研究の進展と将来性」を北澤春樹会員、「採卵鶏産業における育種改良と動物福祉」を後藤直樹氏、おしまいに「戦後畜産経営の展開と今後の方向」について小林信一会員にご依頼しました。きっと歴史に残るシンポジウムになることと期待しています。

これに加えて「日本畜産学会100周年記念誌」を刊行します。この記念誌には本学会が設定している8つの専門分野から、過去100年間における当該分野の研究動向の変遷、研究技術の発展、産業との関わり等について、学会役員を経験された会員を代表執筆者として誌面を展開していただきます。さらに地域畜産学会の歩みや100周年記念シンポジウムの講演内容をミニレビューとして掲載する予定です。

実は100周年記念事業は、京都大学で開催する第132回大会の初日行事として設けられています。開催最終日の18日には「日本の畜産研究は、世界に冠たる和牛生産をいかに実現したのか」という壮大なテーマの下で、第132回大会公開シンポジウムも行います。

前述の畜産学会初代会長である岩住良治先生から数えて、当方で31代目の会長（理事長）にあたります。この人的な時空の広がりや100年間なのです。ハレー彗星の例えではありませんが会員の多くは次の100年、つまり「畜産学会創立200周年記念事業」を見ることはかなわないでしょう。だからこそ今の時を過ごす会員の皆さまは、京都へ集まるべきなのです。開催初日16日は記念事業を、翌17日と18日は大会へ参加する「濃密な3日間」を過ごすことで、畜産学100年のあゆみと研究最前線の両極に触れることができます。これを見逃す手は絶対にありません。京都大学でお目にかかりましょう！